

『大般若波羅蜜多經』読誦音について：資料の解釈 と読誦音の変遷

江口, 泰生
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/11977>

出版情報：語文研究. 62, pp.50-62, 1986-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『大般若波羅蜜多經』 読誦音について

——資料の解釈と読誦音の変遷——

江 口 泰 生

一 はじめに

『大般若波羅蜜多經』は、『大般若經』とも呼ばれる。圖書寮本『類聚名義抄』に、真興の『大般若經音訓』や藤原公任の『大般若經字抄』が引用され、又、多くの『大般若經音義』が作製された事でもわかる様に、この經典の読誦音の研究は、平安・鎌倉時代の漢字音——特に吳音系字音——の一端を明らかにする点に於いて重要なものと言えよう。

現存する『大般若經』関係の音義書は、一般に同音字注形式を主体としており、具体的にどの様な音形で読んだものかという点については、その音注のみからでは不明な点が少なくない。従って、具體的な仮名書き音形・声点等を掲載する資料が必要となる。例えば、慈光寺藏『大般若經』、安田八幡宮藏『大般若波羅蜜多經』、或いは観智院本『類聚名義抄』和音等である。しかし、前者は訓点資料であり、後者は辞書に登録された、基本的に単字単位の字音資料であるという違いも存する。従って、個々の文献の批判によって、

同列に扱い得る部分とそうでない部分とが峻別されなければならないであろう。

本稿に於いては、①安田八幡宮藏『大般若波羅蜜多經』の字音点の解釈(二節)、②具體的な『大般若經』読誦音(①によって得られた婦結)を基に、観智院本『類聚名義抄』和音の解釈(四節)を経た上で、それらを比較する事によって、③『大般若經』読誦音の変遷について検討(五節)したいと思う。

二 安田八幡宮藏『大般若波羅蜜多經』の問題点

安田八幡宮藏『大般若波羅蜜多經』^{註1}の字音点は、延べで七千余り・異なり数で二千余りの声点・仮名書き音形等を収録し、大量の字音資料を掲載している点で貴重な資料であると考えられる。加点点時期は、院政期から鎌倉初期までと推定されているが、加点点事情については次の如く考えられている。

(A)「永意本・覚恩本を通じて、墨筆による仮名書き和音注が極めて多く反切注も散在している。それらが何時、誰の手によって書き

酬	醜	腫	衝	循	峻	豎	宿	濡	澍	獸	臭	鼻	洲	莠	驚	戎	愁	1/2	
										102	467	414	47	569	398	583	305	シ ウ 系 統	
									414				129				314		
																			314
																			315
																			333
																			346
																			512
																		561	
																		562	
	559			554	587	567	557	567	559									ス 系 統	
583	435	430	476			398	429			593	414	470						主 系 統	
	562	503	536			427					467	562							
	591	558				539					559	566							
75	1	128	394	435	587	100	105	5		53	337	53						シ ユ 系 統	
379	3					399		7		103	531	53							
398	9							11		300		53							
399	102							41		304		326							
399	181							46		386		330							
	327							199		303		331							
	330							319		332		381							
								50		332									
								57											
								74											
								84											
								193											
								317											
								327											
								347											
								366											
								381											
								392											
								398											

〔表1〕 安田八幡宮蔵「大般若波羅蜜多經」のサ行ウ段「拗音」の表記

朱 鷺 鬚 戌 瑟 巡 徇									
562	531	429	566	414	531				
566		600	568						
326	399	53	9	54	53	381			
398	398		127	54					
	381		105						
	569		329						
			330						
			350						
			502						

・1は当資料に出現する漢字、2はその漢字に施された仮名書き音形の系統。「ス系統」には「スウ」・「スク」等も含む。「王系統」・「シユ系統」も同じ。
 ・表中の数字は、その仮名書き音形が出現する巻数。

加えられたかについては、目下のところ不明と言わざるを得ないが、その表記を仔細に検討してみると、院政期の頃と判断せられるものをはじめとして、鎌倉時代頃までの概して正確な和音注記の態度が見られ、仮名の形態の考察とも相俟って、おおよそ鎌倉末頃までに数人の手によって注記せられて行ったものと推定せられる。

(B) (一)奈良時代の写経が南都に伝えられ院政初期に僧永意(一〇四八〜一一三四)が白点を加えた巻四百一〜六百の一組が在った。(二)鎌倉時代の初期に恐らく南都辺で書写された巻一から四百の一組が在った。(三)鎌倉時代初期建保三年(一一二五)〜建長五年(一一二五三)に、南都春日神社安居房について、僧覚恩が(一)と(二)とを取合せて、全体に亘って字音の点を加えた。この際僧真興の「大般若経音訓」を参考とし、また当時流布の重誉(推定)撰「大般若経音義」の字音を参考とした。^{注3)}

(A)と(B)の間に、意見の相違が見られる様である。この相違は、(B)

が部分的な異筆は一先ず保留し、(覚恩の加点によって)全体的には均質性が保たれているとする判断によって生じていると思われる。

仮名の形態上からは、(A)が述べる如く、数人の手によって仮名書き音形が施されたと思われる。仮名書き音形が少ない巻は扱置き、巻414・415・425・427・428・429・430・432・435・437・438・440等に施される仮名書き音形は同一の筆致体であるが、巻441・444・448等に見られる仮名書き音形とは、明らかに別人の手によるものと思われる。又、巻451・452・453・454・455・456等は、更に又、別人の筆の様に思われる。更に、それらの巻のグループ内で、「赫カク突ヤク」(425)・「翠ッ堵ト波ハ」(428)・「設シャ利ヲ」(430)・「枯頼スイ」(435)・「衰スイモツ」(437)・「王都」(438)・「嗚ッ鉢ハッヲ羅ヲ」(446)・「抜ハッ濟サイ」(451)・「欲斬サム其首」(452)等の仮名書き音形は、又、別筆と思われ。

この様な状況は全ての巻に亘って見られ、複雑な加点事情を示し

〔表2〕 安田八幡官蔵『大般若波羅蜜多經』の舌内入声の表記

㊦ チ	㊥ チ	㊤ チ	㊤ チ	㊤ チ	㊦ ツ	㊥ ツ	㊤ ツ	㊤ ツ	㊦ ツ	1 2
					75 103 16 29 98					卷一〜卷四百
35 43 6 19 53										卷四百一〜卷六百

・1は舌内入
声の表記、
2は巻数
・表中の数字
は、その仮
名書き音形
の用例数
(延々)

ていると言えよう。従って、これらの仮名書き音形の字体を、逐一
弁別・整理し、その上で、字音資料として類別する事が必要となる
が、前者は当資料の巻数・用例数の大量さも伴って、相当に困難な
作業であると言える。しかも、以下に述べる如く字体の相違が必ず
しも字音資料としての類別と結び付かず、又、字音資料としての均
質性は、(B)にある様には全体として保たれていない様に思われるの
である。

三 字音資料としての安田八幡官蔵『大般若波羅蜜多經』

先ず、前掲「表1」として示した如く、サ行のウ段「拗音」に対
して、巻一から巻四百までは片仮名で「シユ」と書かれているのに
対し、巻四百一から巻六百までは「準仮名表記」で「主」、或いは
「直音表記」で「ス」と書かれるという明白な差違が存する(「表1」
参照)。

サ行のウ段「拗音」に徹底して準仮名表記「主」を用いる事象は、
『法華経单字』反切や慈光寺蔵『大般若経』と共通の背景を有する
事象と思われる。⁴⁾

又、舌内入声の漢字については「表2」に示した如く、巻一より
巻四百までは「㊦」で写す(蝸カツ 128 305 332 333 / 割カツ 349 349 350 366 376 398
399 380 380 / 蝸カツ 47 103 / 羯カツ 105 225 341 181 349 / 詰キツ 75 / 膝シツ 1 9 53 331 346 381
/ 嫉シツ 47 46 330 349 326 / 屈クツ 10 126 305 334 377 297 306 337 / 術シツ 102 332 332 332 392 327
/ 瑟シツ 381 531 / 悦エツ 1 181 381 381 394 398 / 缺クエツ 7 105 1 3 49 181 327 373 376 378 395
/ 血クエツ 75 53 53 53 181 331 398 399 / 歎コツ 1 303 398 398 399 / 忽コツ 1 303 311 /
骨コツ 53 75 326 376 381 381 349 …)のに対し、巻四百一より巻六百まで

は「一チ」で写す(蝸カチ 430 441 503 551 558 560 / 割カチ 552 564 568 582 455 / 蝸カチ 428 540 567 569 580 / 詰キチ 563 / 日ニチ 479 448 / 膝シチ 570 567 531 / 屈コチ 405 414 429 437 568 / 潔チ 430 436 558 562 569 570 / 歎コチ 440 561 / 忽コチ 566 568 581 586 / 骨コチ 414 ……) という顯著な相違が存する(数字は、その例の存する巻数)。

更に、「毀鬼」(332)・「胸順」(52)・「瞬間」(341)・「燼信」(52)・「特豆」(296)の様に、巻一から巻四百までの間に同音字注が出現する事もあるが、大多数は巻四百一以下に出現する。

返伊 531 / 委為 531 / 登永 569 569 / 管永 580 590 / 婉円 531 469 / 蝸通 452 / 詰吉 516 589 / 刑形 597 / 陳客 528 / 龍寬 414 / 蹀果 531 / 蝸火 435 559 / 戈果 427 500 / 裹果 503 / 裏火 558 / 礦光 584 / 甌玩 591 / 兕供 414 / 誨化 479 / 灰化 583 / 穴決 570 / 眩券 503 / 解下 552 / 夏牙 479 / 竅交 470 / 蹇見 600 / 渠古 444 / 皓告 414 / 純を 440 / 姓坐 448 / 膝蒸 414 / 諍上 560 / 折船 448 / 住注 430 / 肅音 531 / 仍乘 528 / 咕羅 429 / 鮮仙 469 / 扇仙 448 / 泉仙 430 / 瑞仙 414 469 479 / 穿仙 414 475 / 産仙 438 / 膳善 430 / 膝失 479 / 丹但 531 / 痔寺 455 / 秩秩 424 / 腫豐 469 / 纏田 414 / 投豆 447 / 徹徹 531 / 膩二 448 / 刃上 587 / 潤仁 583 584 / 鋒泰 469 / 碧白 451 457 / 癖白 435 / 覽百 448 / 璧百 441 / 乏之法 516 / 猛命 452 / 蚊文 448 / 蚤文 510 / 蚋七 448 / 愈由 425 / 逾由 448 / 踰由 430 / 容用 531 531 / 横主 425 (声点・仮名書き音形は省略する。数字は、その同音字注が出現する巻数)

又、反切注は巻一より巻四百の間に「煞山反」(4)の例も存するが、他は巻四百一以下に出現する。

- (1) 揜 漢反 500 / (2) 氫 二 漢反 499 / (3) 氫 行 文反 499 / (4) 赫 奇 格反 425 / (5) 欠 去 翻反 531 / (6) 誨 荒 内反 510 / (7) 膾 克 反 429 / (8) 睫 子 慶反 531 / (9) 坦 他 早 反 479 / (10) 緞 直 利反 531 / (11) 冲 直 離反 513 / (12) 張 勅 員反 503 / (13) 銅 徒 紅反 531 / (14) 筒 徒 紅反 428 / (15) 諾 奴 各反 531 / (16) 馥 房 六反 499 / (17) 氛 敷 黨反 499 / (18) 突 羊 益反 425 / (19) 奩 力 后反

469 / (20) 窰 鼻 量反 531 (声点・仮名書き音形等は省略する。数字は、その反切が出現する巻数)

以上、サ行ウ段「拗音」の表記・舌内入声の表記・同音字注・反切注の他に、声点に関しても、巻一から巻四百と巻四百一から巻六百との間で次に述べる様な差違が存する。

上声点・去声点の出現数とその声点の施された仮名書き音形の音節数との関係を纏めると「表3」の如くなる。(全巻に出現する声字点の他に、一部の巻に出現する墨圈点も併せて処理する。)

〔表3〕 卷・調値・音節数の関係(表中の数字は延べの用例数)

①

去声調	上声調	音節数	
		一音節	非一音節
156	398	卷一〜卷四百	
700	195		

②

去声調	上声調	音節数	
		一音節	非一音節
190	201	卷四百一〜卷六百	
504	139		

呉音系字音に於ける上声調と去声調の調値が、漢字の音節数・漢語に於ける出現位置(漢語の一字目・非一字目)によって規定される事については既に先学の御指摘がある。「表3」を補足する為に、この点から分類して実例を挙げれば次の如くなる。論述の都合上、巻四百一から巻六百の用例を先に掲げる(陀羅尼の部分は除く。又、巻一から巻四百までの比較の為に、墨圈点を除く。紙幅の関係で、全用例を掲載できないので「ア」から「シ」で始まる漢語を掲げる。)

(1) 漢語の一字目・一音節(傍線部以上の例は、去声点が施された例、傍線以下の例は上声点が施された例)

灰^キッ^ト土⁵⁷⁰ / 鐔^キ鐵^キ入^キ589 / 灰^キ粉^キフ^キ583 / 詔^キ観^キコ^キン569 / 嘸^キシ^キ味^キ
 キ⁵⁶⁰ / 射^キ術^キシ^キ582 / 射^キ師^キシ^キ586 / 射^キ夫^キフ^キ592 / 鮫^キシ^キ型^キシ^キ414 / 暑^キシ^キ
 預^キシ^キ570 — 芋^キシ^キ570 / 藕^キシ^キ570 / 杵^キシ^キ上^キ570

(2) 漢語の一字目・非一音節

安^キ撫^キフ^キ425 / 安^キ慰^キキ⁴²⁵570 / 殷^キイ^キン^キモ^キ動^キコ^キシ^キ554 / 殷^キイ^キン^キ敷^キキ^コン
 444 / 雲^キシ^キ霧^キシ^キ558 / 幽^キシ^キ暗^キア^キム^キ435 (以下、多数) — 謹^キシ^キ慎^キシ^キ569 / 險^キ
 ケ^キム^キ阻^キシ^キ441560 / 洲^キシ^キ渚^キシ^キ562 / 莊^キシ^キ再^キシ^キ592 / 賞^キシ^キ上^キ580 / 峻^キシ^キシ^キ
 峯^キ587

(3) 漢語の非一字目・一音節

巾^キシ^キ・匙^キシ^キ562 / 魇^キシ^キシ^キ600 — 翅^キシ^キ羽^キシ^キ / 詣^キシ^キ河^キカ^キ561 / 莫^キシ^キマ^キ書^キ
 キ⁵⁰¹539 / 頑^キシ^キ愚^キシ^キ559 / 清^キシ^キ華^キシ^キ448 / 苗^キシ^キ稼^キシ^キ579 / 珊^キシ^キ珊^キコ^キ441
 / 紅^キシ^キ紫^キシ^キ558565 / 将^キシ^キ師^キシ^キ44512 / 洲^キシ^キ渚^キシ^キ445112561562 / 險^キシ^キ
 阻^キシ^キ441560 / 難^キシ^キ疽^キシ^キ552

(4) 漢語の非一字目・非一音節

眩^キシ^キ駭^キシ^キ558 / 動^キシ^キ搖^キシ^キ567566 / 敢^キシ^キ仇^キカ^キツ^キ457 / 枯^キシ^キコ^キ・匙^キシ^キ頼^キシ^キ559 / 頼^キシ^キ
 頼^キシ^キ516 / 寶^キシ^キ冠^キシ^キ566 / 愛^キシ^キ翫^キシ^キ591 / 癩^キシ^キ癩^キシ^キ448520552 / 其^キシ^キ肩^キシ^キ577 /
 妃^キシ^キ后^キシ^キ592 / 奇^キシ^キ哉^キシ^キ560 / 負^キシ^キ債^キシ^キ558 / 死^キシ^キ傷^キシ^キ538 — 悲^キシ^キ號^キ
 カ^キシ^キ586 / 坑^キシ^キ坎^キシ^キ567597 / 茎^キシ^キ幹^キシ^キ558 / 殷^キシ^キイ^キン^キ敷^キキ^コン444 / 吉凶^キ
 シ^キ562 / 川^キシ^キ原^キシ^キ583 / 清^キシ^キ清^キシ^キ562 / 牧^キシ^キ牛^キシ^キ570 / 殷^キシ^キ平^キシ^キモ^キ動^キコ^キ
 554 / 奕^キシ^キ草^キシ^キ569 / 腥^キシ^キ臊^キシ^キ568 / 翻^キシ^キ翔^キシ^キ563 / 艱^キシ^キ辛^キシ^キ560 /
 池^キシ^キ沼^キシ^キ568600 / 芭^キシ^キ蕉^キシ^キ566532 / 在^キシ^キ再^キシ^キ562
 (1) (4)を纏めると次の如くなる。

(表4) ① 音節数、漢語に於ける出現位置と調値との関係
 (巻四百一〜巻六百に於ける)

1	2	一字目(語頭)	非一字目(語中・尾)
一音節	去声調(1)	上声調(3)	
非一音節	去声調(2)	前接漢字が低平調(平声・入声)であれば去声調を保ち、前接漢字が上声調・去声調であれば、上声調となる(4)	

・表中、1は日本漢字音に於ける漢字の音節数。2はその漢字の漢語に於ける出現位置。(1) (4)は、前掲の用例。後掲(表4) ①も同様。

「表3」 ⑥に於いて、一音節漢字がほぼ一対一の割合で上声調或いは去声調で出現するのは、漢語に於ける出現位置によると言って良いかと思われる。ところが、「表3」 ③に於いて、一音節漢字が上声調で出現する割合が高いのは、漢語の一字目に出現する一音節の漢字が、次例の如く一対一の割合で上声調或いは去声調で出現する様になった為である。

(1) 漢語の一字目・一音節(巻一〜巻四百に於ける)

詞^キ責^キシ^キ350 / 蟻^キシ^キ風^キシ^キ326 / 熙^キシ^キ怡^キシ^キ381 / 衢^キシ^キ陌^キシ^キ398 / 花^キ
 纓^キシ^キ398 / 飢^キシ^キ者^キ3 / 飢^キシ^キ渴^キシ^キ49100 / 五^キシ^キ支^キシ^キ398 / 虎^キシ^キ豹^キシ^キハ
 53 / 虎^キシ^キ狼^キシ^キ332 / 虎^キシ^キ蟲^キシ^キ326 / 屈^キシ^キ傲^キシ^キ366 / 姉^キシ^キ妹^キシ^キ303 / 鷄^キシ^キ巢^キ
 (シ)53 / 屎^キシ^キ尿^キシ^キ53 / 睚^キシ^キ睚^キシ^キ53 / 齧^キシ^キ擊^キシ^キ53 — 于^キシ^キ水^キ399 /
 烏^キシ^キ瑟^キシ^キ381 / 伎^キシ^キ藝^キシ^キ327 / 奇^キシ^キ希^キシ^キ100 / 奇^キシ^キ異^キシ^キ386 / 奇^キシ^キ妙^キ398
 / 枝^キシ^キ葉^キシ^キ303 / 遇^キシ^キ得^キシ^キ335 / 牙^キシ^キ齒^キシ^キ356 / 鼓^キシ^キ散^キシ^キ398 / 資^キシ^キ具^キ349
 350 / 尸^キシ^キ棄^キシ^キ346 / 紫^キシ^キ金^キシ^キ398 / 沙^キシ^キ石^キシ^キ341 / 周^キシ^キ圓^キシ^キ128331381 / 杵^キ
 シ^キ藏^キ398

この結果、巻一から巻四百までに於いて、漢字の調値と音節数・漢語に於ける出現位置との関係は、次の如くなる。

〔表4〕⑥

非一音節	1	一字目(語頭)	非一字目(語中・尾)
	2	去声調・上声調(1)	
去声調		上声調	
		前接漢字が低平調(平声・入声)であれば、去声調を保ち、前接漢字が上声調・去声調であれば、上声調となる	

さて、以上の如く、当資料を概観すると、巻一から巻四百までに字音資料として共通の傾向(「シユ」・「一チ」表記等)があり、巻四百一から巻六百までに又共通の傾向(「主」・「一チ」表記等)があると言える。かつ、巻一から巻四百までと巻四百一から巻六百までとの間に、字音資料として質的差違が存すると見なければならぬであろう。「表1」に示したサ行ウ段「拗音」の表記、「表2」に示した舌内入声音の表記、「表4」⑥の上声調と去声調との関係を根拠として、巻四百一から巻六百までが古く、巻一から巻四百までがそれより時代的に遅れる、各々の『大般若経』読誦音を反映したものと考へざるを得ない。準仮名「主」を用いる事、舌内入声音を「一チ」で写す事、漢語の一字目に上声調が出現し難い事は、「シユ」・「一ツ」で表記する事等よりも古い事象と言へるからである。

巻一から巻四百までは、既に推定されている通り、鎌倉時代初期建保三年(一一二五)〜建長五年(一一五三)に覚恩が加点了したも

のと考へられる。巻四百一から巻六百までは、院政初期以前に加点了された他の資料を基に数人の手によって移点(一部には、院政初期以降、新たに加点了、又、一部には、移点時以前に既に加点了されていたものもあつた様である)されたと推定しておきたい。

四 観智院本『類聚名義抄』和音と『大般若経』読誦音

観智院本『類聚名義抄』和音(以下、「名義抄」和音と略称する)は、その背景に『大般若経』読誦音を有するとされる。

しかし、「名義抄」和音が基本的に単字単位の字音注である以上、例えば、連音節上の声調交替・語形変化をそのまま反映するとは考へ難い。「名義抄」和音に於いて、上声調化している漢字が、『大般若経』の漢語の非一字目(語中・尾)に位置する事は指摘されているが、逆に『大般若経』読誦音に於いて非一字目に出現する上声調は、「名義抄」和音ではどの様な扱いをされているのだろうか。以下、若干の考察を試みる。

「名義抄」和音に於いては、一部の漢字を除いては、一音節の仮名書き音形を有する漢字にも上声調は出現しない(次例)。

- 知 禾_チ 僧中33/紫 禾_シ 法中135/疽 禾_ノ 法下114/愚 禾_ク 法中100/魔 禾_マ 法下104/灑 禾_ヤ 法上35/師 禾_シ 僧下102/侶 禾_リ 仏下本92

しかし、安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』後半部に、既に次の様な例が存在する(三節(3)の用例も参照の事)。

・ 驗^シ知^シ 503 / 驗^カ知^カ 557

・ 紅^シ紫^シ 430 558 451 / 紅^シ紫^シ 565 (参考 紫^シ碧^シ 643)

・ 癡^シ疽^シ 455 / 癡^シ疽^シ 552

・ 頑^シ愚^シ 559

・ 刻^シ魔^シ 520

・ 掃^サ灑^シ 566 430 503 / 掃^サ灑^シ 566 569

・ 将^シ師^シ 445 512

・ 伴^シ侶^シ 552 560 / 商^シ侶^シ 561 579

つまり、「名義抄」和音では、一部を除いて出現しない上声調が、
具体的な『大般若経』読誦音には既に出現しているという相反する
状況になっていると言わざるを得ない。しかも、「名義抄」和音に於
いて、上声調化している漢字が『大般若経』の漢語の非一字目（語
中・尾）に位置する事は指摘の通りであり、少なくとも「名義抄」
和音の時期以前に上声調化が始まっていた事は疑いようのない事だ
であろう。とすれば、『大般若経』読誦音そのままの形を示すというあ
り方からすれば、例えば、右述の諸字に上声点と去声点の両点を施
すという方法（志 禾^シ平^シ・志 法中98）や声調の注記を補うという
方法（連 禾^シ平^シ 仏上56）も採り得たわけである。従って、仮に
『大般若経』読誦音そのままの形を示す方からすれば、少なく
とも、「名義抄」和音は上声点と去声点を並記しなければならぬ様
な場合でさえ、去声点を優先させたという事になろう。

そこで、前掲の用例を通覧すると、既に「表4」④で纏めた如く、
一音節漢字の上声調の出現位置は漢語の非一字目（語中・尾）であ
る。つまり、「名義抄」和音は、漢語の非一字目（語中・尾）の位置
に於ける調値より一字目（語頭）の位置に於ける調値を優先させた

結果、一音節の仮名書き音形に上声点を施す事が少なかったと思わ
れる。とすれば、この点に『大般若経』読誦音のものからは、や
や離れた一種の規範性を呈していると言う事が出来る。そして、こ
れは「名義抄」和音が基本的に単字単位の字音注である事と軌を同
一にするものであろう。

又、「名義抄」和音と安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』の前半部
と後半部とを対比する事によって、次の事が明らかとなる。

漢字一字に二つ以上の仮名書き音形が存する例が、安田八幡宮蔵
『大般若波羅蜜多経』の前半部・後半部に存しながら、「名義抄」和
音にはその内一方のみを採る例がある（10・13は、7・8と同じ理由に
よって「名義抄」和音に一形のみを掲載する例であると判断されるので纏め
て示した）。

	後半部	「名義抄」 和音	前半部
1 龍 ^リ ウ ^ウ	448 ^リ ヨウ ^ウ	龍 ^リ ウ ^ウ	龍 ^リ ヨウ ^ウ 3
2 啄 ^{タク} ク	411 ^{タク} ク	啄 ^{タク} ク	啄 ^{タク} ク 3
3 虎 ^コ ク	414 ^コ ク	虎 ^コ ク	虎 ^コ ク 3
4 壞 ^エ ク	570 ^エ ク	壞 ^エ ク	壞 ^エ ク 2
5 顔 ^{ケン} ク	451 ^{ケン} ク	顔 ^{ケン} ク	顔 ^{ケン} ク 3
6 投 ^{トウ} ク	503 ^{トウ} ク	投 ^{トウ} ク	投 ^{トウ} ク 1
7 特 ^{トク} ク	446 ^{トク} ク	特 ^{トク} ク	特 ^{トク} ク 1

13	宰ソ	428	宰ソ	103	104	127
12	栗リ	429	栗リ	105		
11	逸イ	415	逸イ	326	イ	53
10	塞ソ	599	塞ソ	53		
9	擇チ	415	擇チ	ヤク	1	325
8	若ニ	561	若ニ	ヤ	332	シヤ
		415			53	
						398
						378
						381
						392
						395
						ト
						296
						318

13の内、最も注目されるのが、「名義抄」和音に於いて、7の様な梵訳漢字（鉢・特・摩・花、若・字・門、塞・迦・字・門、逸・婆・字・門、擇・字・門、栗・咭・毗・王、窣・堵・波）の音形が除かれる傾向にあるという事である。「名義抄」和音の中には、「唄モウ・ウウ・ッツ・ヒヒ」（注13 仏中43）の様に「鉢羅華」の「唄ウ」を採録したものも存するが、この様な例はむしろ稀である。とすれば、「名義抄」和音はその背景に『大般若経』読誦音を有するとはいっても、梵訳漢字にのみ用いられる特殊な音形は除くという立場も存するのである。『大般若経』字に於いて、梵訳漢字は別の取り扱いを受けたというような事があり、その影響を受けたとしても、それはそれで『大般若経』読誦音そのものからは離れたあり方であろう。

この様に、「名義抄」和音は、単字単位の字音注掲出方法に拠っている為、『大般若経』読誦音そのものに取捨選択を加え、整理を施した部分があると考えられるのではないだろうか（逆に、『大般若経』

読誦音をそのまま伝える部分については、次節に於いて言及する）。

五 『大般若経』読誦音の変遷

三節で述べた様に、安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』が前半部と後半部で異なる時期（前半部：鎌倉初期、後半部：院政初期以前）の『大般若経』読誦音を反映しているとすれば、従来知られている『大般若経』関係の字音資料に加える事によって、平安末期から鎌倉初期までの『大般若経』読誦音の変遷を知る事が可能となろう。この点につき、以下の文献によって検討を加えてみる（①は用例数が必ずしも多くない為、参考として掲げる）。

- ① 慈光寺蔵『大般若経』平安後期点注13
- ② 安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』卷四百一〜卷六百（院政初期以前の字音を反映するか）
- ③ 観智院本『類聚名義抄』和音
- ④ 安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』卷一〜卷四百（鎌倉初期加點）

③については、前節で述べた如き問題点も存するが、連音節上の声調交替・語形変化や梵訳漢字音を除いた部分（仮名書き音形に示される部分）に於いては、ほぼ『大般若経』読誦音を伝えると考えて良さそうである。以下の如く、特定の漢語に出現する形を掲載しているからである。

『法華経』の音義書注14に於いて、尤韻は全て「シユ」の仮名書き音形、或いは「シユ」に対応する反切形式を有する。しかし、①〜④には「シウ」と「シユ」の間の交替例が見られる。

④ 周シウ 128 331 381

③ 秋主 331 秋シウ

② 眞主 467 眞シウ

① 洲ス 562 512 561 洲シウ 47 129 314 315 333 346

④ 愁ス 314 愁シウ 314

名義抄「和音」、及び③④に出現する「シウ」表記（「表1」参照）

は、ほとんどが尤韻所屬字である。又、図書寮本『類聚名義抄』にも、「瀛洲……眞云シウ」（55頁）とある。これらは、安田八幡宮藏『大般若波羅蜜多經』に「洲シウシヨ」（47 314 315 346 512 561 562）とある如く、特定の漢語に出現する形を掲載したものと考えられる。従って、③は④等との仮名書き音形の比較には、同列に扱って良いかと思われる。

さて、先ず表記史的な事実として、サ行のウ段「拗音」表記が「a」ス↓b主↓cシユ（及び準仮名）↓dシユ」と変化している。③④の段階は、『法華経单字』のサ行ウ段「拗音」の反切形式が成立する段階と平行する時期であろう。三節で、bが院政初期以前の字音を反映するとした理由の一つはここにある。

次に、通撰に於いて、喉内韻尾を脱落させた、所謂「短呼形」は遅れて（特に④に）出現する（③④の仮名書き音形以下の数字は、その仮名書き音形が出現する巻数）。

- ④ 蒙ムウ 蒙ム 54 327 322 346 377 378
 - ③ 孔クウ 孔クウ 孔クウ 孔クウ 384 381 381 388
 - ② 塚チヨウ 塚チヨウ 塚チヨウ 塚チヨウ 332
 - ① 踊ユウ 551 557 563 踊ユウ 1 1 2 10 76 331 380 106
- この様な例は、「家チヨウ 303」・「封フ 399」等にも見られ、少なくとも

『大般若経』読誦音に於いて、通撰の「短呼形」は後に生じたものと考えられる。
最後に、全体的に③から④へ移行する間に、二種以上の仮名書き音形が一種に統一される傾向がある（③④の数字はその仮名書き音形が出現する巻数）。

9 疫ヤク 井ヤク 425 ヤク 427 563	8 壮サウ 者ヤウ 452 452	7 閑ケン 563 ケン 562 カン 452	6 懸オン 444	5 疽ソ 455 シヨ 552 435	4 肅シク 主ク 455 520 シク 520 シク 455 479 501	3 燈シク 531 567 569 590 シヤク	2 弓クウ 469 クウ 592 キウ 531	1 紅クウ 430 558 コウ 418	②
疫ヤク 井ヤク	壮サウ 者ヤウ	閑ケン	懸オン	疽ソ	肅シク 主ク	燈シク	弓 躬	紅 具ウ	③
疫ヤク 77 78 100 103 103	壮サウ 332 332 332 398 563 568	閑ケン 329 332	懸オン 311 346 398	疽ソ 181	肅シク 1 1 3 341 381 381	燈シク 1 381	弓クウ 356 381	紅クウ 1 128 331 346 380 381 381	④

10 (例なし)	殖シキ	殖シキ
11 關クエン 456 552 クワン 583	關化ン	181 300 327 356 378 381
12 塩カウ 600	塩カウ	關クワン 8 342
	(例なし)	

漢音系字音に近い音形で㉔に出現するもの(5「疽シヨ」・11「關クワン」)もあるが、大多数は漢音系字音に近い音形の方(1「紅ク」・2「弓キウ」・6「懸オン」・7「閑カン」・10「殖シヨク」・12「塩カウ」)が排除されていく傾向が顕著である。前節3(5もこれに準ずるかもしれない)。

㉔㉕に共通の漢字で二重形を有するものに量の限りがある為、12列しか挙げられなかったが、㉔㉕を比較した結果も、漢音系字音に近い音形の方が時代を下るにつれて排除されていく傾向が強い。

㉔㉕を比較すると、(1)前半部と後半部に同字の加點例があり、その前半部のみ二重形が見えるもの、(2)前半部と後半部に同字の加點例があり、その内後半部のみ二重形が見えるもの、(3)前半部と後半部に同字の加點例がなく、共に二重形を有するもの、(4)前半部と後半部に同字の加點例がなく、どちらか一方にのみ二重形のあるもの、の四種に大別出来る。

(1)前半部に二重形があるもの(カッコ内は、後半部に出現する仮名書き音形)

俺エム(俺アム) / 映エイ(映エイ) / 婉ラン(婉冉) / 弘コウ(弘コウ)
 契ケイ(契ケイ) / 鍵ケン(鍵ケン) / 玉コク(玉コク) / 適シヤク(適シヤク)
 村ソン(村ソン) / 諾ナク(諾ナク) / 牌ハイ(牌ハイ) / 方ハウ(方ハウ)

(方ハウ) / 靡ヒ(靡ヒ) / 壁ヒヤク(壁ヒヤク) / 封ホフ(封フ) / 篋メツ(篋メチ) / 孕ヤウ(孕ヤウ) / 臚チヨウ(臚チヨウ) / 隸レイ(隸レイ)

(2)後半部に二重形があるもの(カッコ内は、前半部に出現する仮名書き音形)

蔭イム(蔭オム) / 懸オン(懸オン) / 疫ヤク(疫ヤク) / 娜ナウ(娜ナウ)
 嬰エイ(嬰ヤウ) / 竭ケチ(竭カク) / 閑ケン(閑ケン) / 弓クウ(弓クウ)
 欽キム(欽キム) / 漁キョ(漁キョ) / 黜コン(黜コン) / 颯キョ
 環クワン(環クワン) / 誨クワン(誨クワン) / 暇ケ(暇ケ) / 動コン(動コン) / 壮シヤウ(壮シヤウ) / 策サヤク(策サヤク) / 若シヤ(若シヤ) / 肅モク(肅シク) / 暖ナン(暖ナム) / 撻タイ(撻ツイ) / 統トウ(統トウ) / 泛ホム(泛ホム) / 攀ヘン(攀ヘン) / 敏ミン(敏ミン) / 戻レイ(戻レイ) / 麗レイ(麗レイ)

(3)前半部・後半部共に二重形の存するもの

映エイ / 暗アム / 難オウ / 懷クワイ / 迎キヤ / 羯カク / 顔ケン / 施セ / 掃テア / 容コウ / 投トウ / 擇チヤク / 啄トク / 虎ク / 若シヤ

(4)前半部と後半部に同字の加點例がなく、どちらか一方にのみ二重形の存するもの

㉔ 前半部のみ存するもの(後半部には同字の加點例の存しないもの)

闇オム / 疔ク / 抑ヨク / 揆ケ / 迴クキヤウ / 慣クワン / 酌シヤク / 遵ソン
 緜ナン / 啼テイ / 豹ハウ / 髀ハイ / 痲ボク / 繁ホン / 嶺レイ

㉕ 後半部のみ存するもの(前半部には同字の加點例が存しないもの)

誘ユウ / 夏カ / 塩カウ / 瞎カチ / 減ケン / 刑ケイ / 競キョウ / 謹コン

瞎クワチ／串クワン／絹ケン／沾テム／弩ヌト／裨ハイ／圍リヤウ

(1)と比較して、(2)が多数である。(1)の中には、「諾ヲ瞿陀」の様
梵訳漢字音が偶々前半部に出現したもの、本来「鍵キヤ門」とある
べき所に恐らく誤って「鍵ケシ」の様な音形を施してしまったもの等
がある。これらを除けば、『大般若経』読誦音に於いて、漢音系字音
の側の音形の混入(1)よりも、むしろ漢音系字音の側の音形を排
除する動き(2)の方が、時代と共に優勢になるという事になるの
ではなからうか。

六 おわりに

『大般若経音義』^{注7}を通覧すると、前節(1)(2)で掲げた二重形が一方
に統一される場合が多い様である(無窮会本による。(1)の*印は、後半
部の仮名書き音形と一致しない音形を表わす音注と考えられるもの。(2)の*
印は、前半部の仮名書き音形と一致しない音形を表わす音注と考えられるもの)。
(1)掩闌／映阿有／弘窮／村純*／諾那具*／牌彼／靡微／璧白／封付有／孕用
／膺澄／隸例／瘦別

(2)疫赤／娜那／閑賢／漁魚・漁喜余／艱久／仕生／策尺／肅四久／暖難／
統通／泛梵／攀邊／戾米／麗例／暇可／敏資*

統一された音形は、少なくとも安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』
卷一〜卷四百までの例と良く一致し(2)、逆に卷四百一〜卷六百ま
での例とは積極的に一致しない(1)場合が多い。『大般若経音義』
(無窮会本)が訓点資料より整理された字音資料であるとするとなら
ば、安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』卷一〜卷四百は、卷四百一
〜卷六百よりも整理されているとしなければならぬ。そして整理

されていない部分(卷四百一〜卷六百)から整理された部分(卷一
〜卷四百)にかけて、漢音系字音の側の音形が減少していくとすれ
ば、『大般若経』読誦音は、丁度『法華経』の音義書が整理されてい
く動きと平行して、漢音系字音の側の音形を排除していくと見なけ
ればならないと思われる。

注1 東辻保和氏「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多経の音注(資料)」「訓点
語と訓点資料」第44輯、S.46・6)

注2 東辻保和氏「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多経に就きて」『海南史学』
8、S.45・6)

注3 沼本克明氏「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」(武蔵野
書院、S.57・3) 27頁

注4 拙稿「シウ・「シユ」・「シユウ」」(『文献探究』18、S.61・9)
参照。

注5 卷一から卷四百までは、濁音を示す複点が比較的施されるが、卷四
百一から卷六百までは、それが少ないという顕著な差も存する。

注6 古く奥村三雄先生に「呉音の声調の一性格」(『訓点語と訓点資料』
第18輯、S.36・10)・「呉音の声調体系」(『訓点語と訓点資料』第8
輯、S.32・9)があり、沼本克明氏注3引用書で、漢語の語頭、語中・
尾という視点を加えての御指摘がある。

注7 移点か加点かという問題の解決には、困難がつきまとうものである
が、申の様な根拠から一応移点と考えておきたい。諸賢の御教示を御
願ひ申し上げる。

(1) サ行ウ段「拗音」の「主」表記、舌内入声音の「一チ」表記等、
表記に統一性がある事

(2) (1)の事実と反し、二節で述べた如く、数人の筆によると思われる
事

(3) 卷四百四十以降、十巻前後で筆致体が変わる様な傾向のある事
(4) 三節で引用した反切注の内、5・6・7・10・13・14・15・16・

18・20は、『広韻』と一致するが、2・3・7・8・19・20は玄應『一切経音義』の系統の反切と一致する。ところが、5・8・10・13・15・20は同じ巻にあり、しかも同筆である事

(5) 3 「氾 行文反」は「氾 紆文反」、19「鑑 力后反」は「鑑 力占反」の誤写である蓋然性が高いと考えられる事

注8 例えば、巻88には、「ス」に「欠」、「ニ」に「个」(「企」字の変形)の字体が用いられ、平安後期に遡る可能性がある。

注9 注3引用書17頁以下参照。

注10 注3引用書17頁以下参照。

注11 『大般若経字抄』に於いて、『大般若経』読誦音を背景に有するといつても読誦音そのままの形でない事は確かである。どの部分が『大般若経』読誦音に負っているのか、どの部分が離れたものであるのかの見極めが重要であろうと思われる。

注13 松尾拾氏「慈光寺藏大般若経の字音点について」(『国語学』3輯、S 24・11)

注14 『古辞書音義集成 法華経音義 5』(汲古書院 S 55・9)

注15 注4引用の拙稿参照。

注16 『図書寮本類聚名義抄』(勉誠社刊、オフセット版、S 51・11)

注17 『大般若経音義の研究』(築島裕氏、勉誠社、S 52・8)に拠る。

注18 一節で紹介(B)した如く、覚恩が加点了した巻一〜巻四百までは、『大般若経音訓』・『大般若経音義』を利用した為、この様な結果となるのであろう。三節に引用した「纂 山八反」は図書寮本『類聚名義抄』所引(178頁)の真興の『大般若経音訓』の反切と一致する。又、三節に引用した同音字注は、覚恩によるものと推定される。巻一〜巻四百は、それらを利用しつつ加点了し、巻四百一〜巻六百は既に加点了れた状態にあった為、同音字注を施したものと思われる。結局、前半部と後半部との差違は、『大般若経』学の学習の程度の違いによると思われるのであるが、字音の学習によって、音形が整理・淘汰される過程が良く窺えるのではなからうか。

本稿の要旨は、昭和六十一年度九大国語国文学会(S 61・6・8)で発表した。御指導戴いた奥村三雄先生を始め、御教示戴いた諸先生方に御礼申し上げます。又、資料の閲覧を許された高知県安田町教育委員会、安田町中央公民館、参考文献の入手に御協力下さった高知大学附属図書館、高知県立中央図書館の皆様へ感謝し、御礼申し上げます。